

群書類從

紀行

十

4曾  
775  
222

4 5 6 7 8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160

1 曾 4  
775  
222

摩訶書類從卷第二百廿六



檢校保正一集



紀行部十

普光寺紀行

亮惠法印

寛正六年七月上旬より一ヶ月に亘り一泊一宿  
の善光寺へ参りしに依りて金銀宮より西竊跡に  
おのりしに多量の中流第層小堀の縁の畔に  
とらへし一三又四乃既より其を明きと利波の成  
ちるゆゑなり  
ゆゑより其の如くは其の如くは其の如くは其の如くは  
おの一日と川と心なり

玉川を海にまかせた水は水の水のうら  
なうあるを乃海のありにありゆらうなしくと  
湖の底にわたり鳴鶴飛盡く夕陽おひり  
あかしの

玉川を海にまかせた水は水の水の水の水  
波家跡無花のなつ田子うらうらうらうら  
をゆりゆきとゆらうらうらうらうらうら  
都をわたりまゝもていふ海やまゝもていふ海や  
うらうらあしきうらうらあしきうらうらあしき  
やうらうらあしきうらうらあしき

晴やまをなつ海のうらうらあしきうらうらあしき

あまのうらうらあしきうらうらあしき

はるかなる水うらうらあしきうらうらあしき

かくまふ山うらうらあしきうらうらあしき

あまのうらうらあしきうらうらあしき

有珠海にまかせた水は水の水の水の水の水

あまのうらうらあしきうらうらあしき

あまのうらうらあしきうらうらあしき

あまのうらうらあしきうらうらあしき

あまのうらうらあしきうらうらあしき

あまのうらうらあしきうらうらあしき

あまのうらうらあしきうらうらあしき



漸よわやひわら物ふまの庵は蕭寺は瘡の群  
う川のき清多りワノ雨もいも力に〜くうり打  
り〜ひ初被もあゆ〜るれは漸禁法儀鼓も疾息  
〜ゆきとも明の秋の空〜人少雨々瓜晴りし〜  
又まかゆり及小花金のの里と云出村あり悪徳の  
ちくゆえうも能あまりに

當のあぢも等ぬ林乃雨とあやとさきぬる公とさば里  
限奇能初来乃捕〜園〜実法ゆもきう〜んせ  
まゆ入多む〜西塔とゆ〜快意法師〜  
あひぬ拙者<sup>イタヒ</sup>乃師隆運<sup>運</sup>法師乃結と〜人あ〜  
まま多たひ〜依性平のままゆ〜とや〜と〜

〜と〜にサ〜と〜ひ〜明乃日信法王〜  
た〜と〜小波乃山〜  
〜と〜山霜と〜  
あ〜と〜

後乃山里とひ初〜  
西乃別の斜あ〜  
引等と〜人〜  
瑞瑠壇を〜  
おろ〜と〜  
乃注書と〜  
も〜と〜

曉月乃ありまに月いづ清くたけり快捨山依お  
りし御りて

ゆやう事りそあふ文脈や快捨山のあきけ月  
十五日につまなく高嶺と云く越りまきの勢川  
かづり又戸隈山いりありぬさきけ瑞籬とぬ  
し多奥院へりゆふふさく山つらうすつれ  
く中臺に南北ちん川の嶺ありとあくまに  
岩伝くさひあましくいふとゆしこりみ事万山の  
こらけり地ふ果ん果早わさうりて或く佛菩薩  
の来記の姿もあり或ハ天人聖衆乃快捨山と  
けんとす所をも併祝名菩薩塚乃御地ふ事せ

ゆい社記と水の嶺乃半にさありてあに  
向ひ大の勢若金流日へ傳り入るり彼所神と  
多力雄めくゆまをせけり地と

瑞籬やあまの山に雲のけきありと神乃力をみる  
かきしあわさ

快捨山を麓のあじと河さく河記とや谷のさく山  
十曾に又結藤乃山ふさありぬあけの志とサ  
と記さまらう次りあけ結ふみけけきハ

あけ山のあけけきけきぬまのあけ一高乃快捨山  
十七百乃山のありけ中流海峯ふあきりあまれ  
山屋のありけ那月隈さくさくあけあまの

西の空より流るる水は、  
名は送るて

雲りともけあめ、  
おのくはききかどとく、  
すくひうのりたす、  
て鏡らるる恥ゆく、  
いづくせとくまふ、  
と流るる水は、  
あそく海中にあり、  
海

遠に石を根あ、  
ぬ地はうの山、  
白山の山影、  
おやえはるふ、  
いふ入あさ、  
五入ま、

第一巻以續杖策拾葉集授合年

天保四癸巳年夏六月廿日於益城下郡菅用郡重見山  
藤井谷山家書寫之  
中村直道

あり河乃記

後成恩寺園白 兼良云

胡蝶の爰の中又百年の樂を貪るゝ蛇牛の角の  
うへに二玉の輝を濁せり〜と云ひあり〜  
き〜如常を免の姿を〜と云ひあり〜  
望つゝ瓜ちやま守あり〜と云ひあり〜  
光世の礼〜より〜  
ぬきの月日れゆ〜と云ひあり〜  
おふふを〜と云ひあり〜  
あり〜と云ひあり〜  
に〜と云ひあり〜  
め〜と云ひあり〜



みのおもひに... けいこく... けいこく... けいこく...  
ゆへにあつた... 次言... 妙の... 人の...  
か... もあ... せ... せ... せ... せ...  
さ... め... け... け... け... け... け...  
あ... 月... の... の... の... の... の...  
り... こと... の... の... の... の... の...  
七... 白... の... の... の... の... の...  
る... 物... と... と... と... と... と...  
乃... 今... の... の... の... の... の...  
ま... く... 般... 着... 寺... の... の... の... の... の...  
ま... こと... の... の... の... の... の...

す... の... の... の... の... の...  
ゆり

聖... の... の... の... の... の...  
泉... の... の... の... の... の...

源... の... の... の... の... の...  
あ... の... の... の... の... の...  
あ... の... の... の... の... の...  
に... の... の... の... の... の...  
り... の... の... の... の... の...  
来... の... の... の... の... の...

た... の... の... の... の... の...



あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は

舟人好むる御心は  
舟人好むる御心は  
舟人好むる御心は  
舟人好むる御心は  
舟人好むる御心は

あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は

あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は

あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は

あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は

あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は  
あはれなる御心は









少年の人世の背はえ多人を感歎せしむ  
と異曲同予といふ也つらや

十日稼梨河孝考根まといひ孫も也一場いそ  
存貞伊法師又年暮し多神紙くも稼  
系しそ終らにゆきねかう一人感しきり  
傍知と具ぬ入むりつりとえしなり

十日正法の事の権冊の許あり詩の歌を新瓦  
破也あはれ破とあけう初集ふみころあやさ  
魂のありしゆなり抑作文のゆえしき  
こしとこくわくうあのかく顔夢あともわき  
ら多ゆきく傍却あまりにすあゆれた古八字

派やうくわきほくひくうううあ孝又方人  
前ふ二林の松とくくみふ細とくく次  
更ふた追述一偈云

鷲峰正法遍塵々 靈藥毒人還活入

五祖山中難作主 裁松道者是前身

十回わくうゆへく熱らきぬく下向次西中  
石所落跡とも歴流たはは竹まきけいふ  
細川右京又勝元祖は卒をけりあえり東軍の  
稼梨のうけしそあまきと此きあまふしうひ  
陣執す家こりやあしむくく八通如きなり  
をねましぬうむひあふたあまき存去初述





事はわりの又一艘と向しきくされぬのりて見  
物とわが下らそは川乃流ありてそそ季風もたま  
まを櫓舟敷をてしうねりしよとまきいし事

ゆふやまた半そこの物流らるるしはわの物舟に敷あり  
物乃美沢とわさる多物舟の白縄とあつしよ許  
ろくちふりしありてし物もささる流もふとの入  
くくちされぬおほき又舟と備すりのなり

物舟入るもやも港のし一舟もたはるがふとあきしを  
すかちら物乃と流らる船とあつし大舟とあつて宮流  
はあきとあつらるる物もささる流もふとの入  
とあつらるる物乃と流らる船とあつし大舟とあつて宮流

十九日あつた物乃と流らる船とあつし大舟とあつて宮流  
大日満南きんとはたあすあつらる流もふとの入  
りし物乃と流らる船とあつし大舟とあつて宮流  
伴流もたはる物舟とあつし大舟とあつて宮流  
や流もふかのしあつらる流もふとの入  
東もあつらるる物乃と流らる船とあつし大舟とあつて宮流  
とや文和のはは光教と子南軍におおきし由  
あつらるる物乃と流らる船とあつし大舟とあつて宮流  
りし物乃と流らる船とあつし大舟とあつて宮流  
今にありたのしはあつらるる物乃と流らる船とあつし大舟とあつて宮流  
むよとあつらるる物乃と流らる船とあつし大舟とあつて宮流



いふかき... 舟の東... 河多神... 明を... 有... 七... 赤... 鴉... わ... 帝... い... 若... 世... と... 川... 一... 又... 中... を

いふかき... 舟の東... 河多神... 明を... 有... 七... 赤... 鴉... わ... 帝... い... 若... 世... と... 川... 一... 又... 中... を

若... 世... と... 川... 一... 又... 中... を

南行野里下陽坡

西望平湖遠水波

孤鴻屹然何所似

琉璃万浪一青螺

旆幟如云似海峯

西望平湖遠水波

旆幟如云似海峯

かきや

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

ゆり

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

あり

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

あつち松のうをんやあつちのうをん

えらう川うさあふ原水より水の毒もろぬ神おきり  
報着すくふふら成を厨りてあはれを流さし河  
あふやふさう一燈廟は山狩はふいひく  
あふららとんたう一燈廟は山狩はふいひく  
あいうはのまあ

秋袖と物すさめぬさくしそあうは社の常然さ  
わきさうハむ花の杜の郭とあうらりは声あか  
さるは武作といふあやう

ゆらゆらゆらとそそそそひらひらとそそひらひらと  
古の白根の心とさうさうとさうさうとさうさうと  
より伊庭ふりつちゆらつふ里とあうとあうとあうと

あははらひらひらとあははらひらひらと  
つらひらひらとあははらひらひらと  
そは白とあははらひらひらと  
あははらひらひらとあははらひらひらと

南未北望漢宮天 一夜江邊聽雨眠  
白髮更添新白髮 青鬢不更旧青鬢  
女官伊庭ふりより兵士さくはるは目もあふ風やあ  
水は白くくくく

雨あまを山田はあははらひらひらと  
からうさあふ原水より水の毒もろぬ神おきり  
報着すくふふら成を厨りてあはれを流さし河

ま〜ゆきとらや 雨はらりり 目をとどきり 事終  
因とのこも 冷風雨風ふり〜

古有馬場と〜川と〜 庭庭ふらふとく

憶得之生石上縁 一庵風雨夜と眠

今朝更下山前跡 光樹雲深哭杜鵑

紫のあふる入ふらりり 花はやすらん 一夜ありり

かひこは水により 伊賀のこもりはつ〜海と〜又度

な終く浩水よ 踏らぬふ事 石を〜 次おけいふ

のうりお流る〜いふ 伴流よと雨り 今昔の業師

お果は〜くま〜ゆき〜いりり

あふらや 玉流るはそとれ 瑞雪のきふら川 西朝日

廿六日あふら 日おき〜たかときり 玉滝とをらあや

ハサ〜いふ 雨と〜ぬふ〜いり〜ありら松あり

石の〜いふありあやら 牛頭とま〜あま〜

戸次〜あや

つ〜あふらぬら ねせは 坂あや〜い〜い かわは橋とらひ〜あや

ゆふ〜あふらぬら ねせは 坂あや〜い〜い かわは橋とらひ〜あや

わ川〜いふ 川〜い 氷流る 法中 伊賀の 役人 ありあや

つを〜あふらぬら ねせは 坂あや〜い〜い かわは橋とらひ〜あや

あ〜い〜あふらぬら ねせは 坂あや〜い〜い かわは橋とらひ〜あや

い〜あふらぬら ねせは 坂あや〜い〜い かわは橋とらひ〜あや

又股の川と〜いりて 某地寺ふりあり 是〜 招提門統





えんせうのぬちのりて遊一白のたぬまこといふれぬきり  
言のふくを統とゆりや金銀のみゆるる目的の  
素獨り財を南の南坊一はくはた雨をれり  
こころよくきんを金銀ふとゆり入るきり

天保の癸丑の庚辰の月のとくふ秋ま一日紙用の事  
中村直道

正廣日記

世中みよきこと海を文古の海張る心へいふまも  
あゝあ大和國泊瀬ふふふありく年月と  
より約りた文明の年一月古の津と老と  
ふとと記す人ふの海へあなれた  
杉津の理更之親ふく討向一子とありく代り  
より約りた久思来しと入約りぬきとありて  
ふと織のこころもふとと河へと回約きと駭  
河ふふふふありたり約りたありたふと士  
河ありんぬいありたりわたりきりきり  
とありたりとすありたりありたり







雜

うひとちのうまは赤まの法へもみかあきありて道徳清し  
いふらぬや書書りまをゆ乃書紀を月と人よかそん  
くよまゆりあゆいわが紙を紙一ゆり紙を月ゆを  
ありぬじいへ川上徳舟紀政老信平乃あまゆり  
もあられしゆと今は世中うゆをそ知人も  
中江條川信とく却めてみ一人前中よ信ゆり  
をありたる由まをせし控こゆりしゆとまゆり  
信とゆひゆり又うつゆゆとまゆりしゆとありて  
道徳まひたるゆり也まゆりゆりまゆりゆりゆり  
ま人もまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

あこゆりひいゆり昔法を紙をゆりめまゆりしゆゆり  
ゆりしゆ

むのまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
ゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
紀政乃ゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
あまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
おゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり



と下紙をあるに又書くべきをせ

馬床人君のみしむはあまの山谷をきや百五のん  
出くわいといひたる也遠江國塩谷浦入江常純言  
人首を信よきくすめし御名よ一人のまゆより武能  
五人越ゆるが秋藤枝よあつて守て睡の糸入たり  
ひののこちを流るるきしうはらふより人紙  
うへに書け馬の糸は送る終る  
うはらふよりが家何せうと終るよと終るの下た  
屋きくそらあまの山谷のひまの  
あひまをよめたるは山の出るうらまのひまの  
まを十九日又上徳女よりかの清見開りあつてはわ

うせて紙の家川よふく分とうへも送賜  
君はと初めこれ終るこを終るゆと終るのあつて  
いあつて終る終る終るよと終るよと終るよと終る  
よと終るよと終るよと終るよと終るよと終る  
あつて終るよと終るよと終るよと終るよと終る  
人外と初めと清を信よきくすめし御名よ一人のま  
木一日のりのりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
うあふ山谷浦塩谷浦よふ人よりあつてゆりゆり  
うはらふよと終るよと終るよと終るよと終るよと終る  
云新へあつて終るよと終るよと終るよと終るよと終る  
いよと終るよと終るよと終るよと終るよと終る

うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
やまゝひてゑのありちりたての物も寺とくありけり  
山も海ありていへばあはれ御堂のうきうきと海あり  
本ありていへばあはれ二年の御堂のうきうきと海あり  
事ありていへばあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
きりりあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ

うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ  
うきうきと海をいへばあはれうきうきと海をいへばあはれ

文明六年正月一日

釋正廣

此一帖以他本書寫之度精雲を後えむ可  
證年歟

正岡五判



天保四年七月朔日書す

中村直道

平家紀約

源持資

文明十のまり二をのつぬ水母のくもをけり  
あまの内室くも旅人おゆぬおせし避暑の  
祇とあれぬゆまうのかりぬをへておはるし  
かたのゆきぬぬくくすのひもぬるぬるをさ  
多常の産ぬきとあやゆけまのくこまりに金の  
くえよとせぬんおひぬぬらいうけぬわさな  
佐城之節を清藤原重純小笠原九文源忠貞を識  
ゆきとく日漸きけし従兵とありてくくしとあ  
ぬとありて馬をふしとあり海乃をさるし小の  
すまひもゆき柴のふくし汁の旅人の来立の地



世に送れども何なりしとていついふとわづらひく  
きりのおもひなりけり大磯のありて

弟枕と記のあも大磯の浪を衣刺とてひびき  
ふゆあきり候とて

浦風よゆとて秋のやまは秋三のしちや言の  
庚申とてあふとてふふあともあつ月夜とて

名行かして寝ぬの里の枕とてあつ月とて  
梅浜とてあふとて

まのふ旅の神とてあつとてあつとてあつとて  
東地とてあつとてあつとてあつとてあつとて

信神の色とてあつとてあつとてあつとてあつとて

小田あつとてあつとて

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとて  
板橋とてあつとて

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとて  
箱根のあつとてあつとてあつとてあつとて

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとて  
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとて  
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとて  
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

黄瀬川乃里山

山脈のつらふしと白ぬれ流のせや  
留生ぬふまわあくうらふをこけ

こけあふまをれをこけあふまをれ  
暮景樓の千夢れあやをれはくね柳ゆうとゆい  
くねうにわやえぬねねくをうらふをねね

今もあふまをれゆのゆきあふまをれゆ

若洲より

とらうらふまをれゆくあふまをれゆと  
同流よりあふまをれ

とらあふまをれゆは早苗せられたゆり井杭も今い波のねま

沖津の舟いありぬ庵原民部入る禪道智とま  
けくあふまをれゆは早苗せられたゆり井杭も今い波のねま  
うらふまをれゆ首座に統も持しとゆいあふまをれ  
族乃こけあふまをれゆは早苗せられたゆり井杭も今い波のねま  
うらふまをれゆは早苗せられたゆり井杭も今い波のねま

深堀やぐねもたそきひ人のねまをゆい  
法見海山

さうらふまをれゆは早苗せられたゆり井杭も今い波のねま  
長流山

あふまをれゆは早苗せられたゆり井杭も今い波のねま  
手紙あふまをれゆは早苗せられたゆり井杭も今い波のねま

かりき草子

嵩山一峰とてあつてあつて旅人志つてなつて  
宇津山とてあつてあつてあつて

友深く志け積りたつたあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

やほつらるるまゝ入て書請つゝいまのつと妹よみんうも  
吾人のまほひひくく物や一筆もひひくすも  
あつらひけり青野々原よ

あつらひて小程乃毛もほねまへおぼのつちも花乃成り  
夜相説といふ不しん

印とらひ福をくくに秋乃は秋のころとあつらひ  
才山めり

右月の月法光もほひてふ乃下病とかなしあつらひ  
光野はもりにほく

まことねもむ形おれ秋のつとむよかふふ秋のつとあ  
あつらひはあつらひ

あつらひのまもつらひ 流山のつとあつらひ  
年月乃のつとあつらひ

都よりまもつらひ山あひつとあつらひ  
山とらひはあつらひ

旅人あつらひあつらひあつらひ  
まもつらひ三葉朝院坊乃りやあつらひ

右之紀行有太田道灌入道平右衛門兼光也  
二佐々木富之丞

元和二年二月中旬

沙門尊隆

天保四年秋七月二日寫す

中村直衛

筑紫道記

宗祇法師

二毛乃切し〜り亭は素小なるまこととありて  
心一毛のいかに建てるなりはりあり〜りあり〜り  
ゆゑひ力をとるべきのうた〜つむむけふ他〜り  
柳りかくまうゆ〜り中少と何〜り〜り〜り  
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
ま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
川乃実なる誠〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
浦新海のあり〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
世〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
ゆ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

















たゞりてはと初と千載のまこととく終るは

若くおのふあふ小田のぬれ赤月

のまこと海陸の侍病くとりて海をりあやう言と  
いふありしと昔の杖と終り院らうささる不根をか  
記しとて去来と名をて病とやと記さるまゆりて夢  
と名ぬ別何のよ記さる道とゆえあり御と神の  
冥助ありふととと記しとてあまももとます後不陶  
中狩り捕弘詮の籠あり傍の禪院は即りしと  
又の日記籠と中内ありとつらととわらふと手注  
記り梅根即を安の附弘根のとなく一わあり  
ひゆくまよふ民のまなき林法とら

此因乃ち代あれたる百姓は禁をてあひあへるたは  
ちり初子の次ありとあそひ音とゆかりはあり  
手古法程少くと初絶とゆきはありとあさわもゆき  
れゆえと切堂何ゆきぬ十音折り弘おれ知不長尾  
いふた初部より志法とゆき家とて又とつらとやハ  
何とて百教とてしは山ありはまよりあま

ゆみまよとあまを伝みとるは由法山とら

是より宰府重廟への系陶弘詮より侍三人流るゆ  
ゆりしとてむととてかありしと山とてしと釋路め  
よのあは源紅葉のあきありとつらとつらあれたる  
嶺とてしとゆきとみよるは折路より白月とて











あさりしを山根乃内廣はるりもなり海なるる程  
考る社人廣原入縁託託部 にはう社をいひ  
うらむら社中社外乃重潤をいひていひて  
ましく詠つてとて万葉にともるわらこ社名とゆらぐ  
みましく炭竹の社まづ 厚香雅の海まををりみ  
解るるし海は酒を能くしり平代のとてく 一あゆむ  
よりあきくうら海約あひしむむか 海のたをく  
はくしあゆむの音を能くしりしむむかあゆむ

海風とあまの海乃あしゆと道乃を問ひしむむか  
かしおのる漕舟人舟船のうりふは老とていひしむむか  
つ飛して生業とていひしむむかをりしむむか

此のたをり海を 縁託託社 一あまみとあゆむの  
あさりしをいひて 海を能くしりしむむか  
梅門のうら 海を能くしりしむむか  
けしと海 縁託託社 中社外 礼の令をいひしむむか 神  
あゆむいりし 此のたをり海を能くしりしむむか 社中とていひしむむか 大  
木のまづいりしとゆらあゆむとみゆらむをいひしむむか 此のたをり  
ゆ社あゆむをいひしむむか 道乃のたをりしむむか けしと海  
ゆ社あゆむをいひしむむか 一あまみとあゆむの  
あゆむいりしとゆらあゆむとみゆらむをいひしむむか 此のたをり  
そのとて 永享とて年の歳とていひしむむか 一あまみとあゆむの







西成よりけき市社なりとしをのしりてつりて海のかんこ  
 より流しおのりて大木をたぐひあらしめて地をいさか  
 らしめりて社地を方ハ以て其めりて志願の場なりしつこ  
 海の中たりしにたたりたる海芽の物なりしとて  
 乃徳しく西成法少くしやせりてなごりありあり  
 つりてしをたぐひてしつりてしつりてしつりてしつりて  
 おのりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりて  
 へしをゆる社地のありしをその神さしりてしつりてしつりて  
 入をいさかふありしをゆるしつりてしつりてしつりてしつりて  
 於此ちとてふ別高社乃神ありてやそそ神さのありし  
 たりありしとて先師神事と名ふる中と神功を伝

在る富満里辰也姓之在る善善流れつりて海をい  
 のしりてしつりての松は四神乃神ありてしつりてしつりて  
 此かそそ神さしりてしつりてしつりてしつりてしつりて  
 がしつりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりて  
 されしつりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりて  
 そつりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりて  
 しつりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりて  
 そつりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりて  
 なしとてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりてしつりて  
 望む法あり

松乃山よりおのりて世成ありしつりてしつりて











又の日訟待り侍り〜事再たて申す地はとさく  
さき〜法御ふ御も色は法御も〜事くたぬいひ目と  
言ひ八月の光斗候も〜事と事の長法あり〜事  
やうな〜事候も〜事の法あり〜事いひ法候統  
大御〜事といひ統候も〜事あり〜事〜事〜事  
り〜事〜事 法御法御ありありぬ月入〜事  
候〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
とありぬ事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
の迫つと法御り〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
事人の御りゆり〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
豊浦の法御あり〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事

左の事〜事 法御候明新律師の坊よりぬ日御  
旅の事ゆ又法御事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
と〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
會道れた法御も又良候といひ〜事〜事〜事〜事〜事  
外〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
また法御候入法御山家大願ありあり〜事〜事〜事  
候あり〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
こと〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
ゆ〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事  
あま〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事〜事

たつこもいしつらき候に記したる宮様しく下付  
ふ記のしる書を撰紙せしつらきもつらふおふ  
あつこもいしつらき候に記したる宮様しく下付

ふりつらき候に記したる宮様しく下付

一巡りつらき候に記したる宮様しく下付  
とらふおふ記のしる書を撰紙せしつらきも  
又記のしる書を撰紙せしつらきも  
たつこもいしつらき候に記したる宮様しく下付  
そのゆりつらき候に記したる宮様しく下付  
また記のしる書を撰紙せしつらきも  
また記のしる書を撰紙せしつらきも  
また記のしる書を撰紙せしつらきも

ひらきつらき候に記したる宮様しく下付  
ひらきつらき候に記したる宮様しく下付  
ひらきつらき候に記したる宮様しく下付  
ひらきつらき候に記したる宮様しく下付  
ひらきつらき候に記したる宮様しく下付  
ひらきつらき候に記したる宮様しく下付  
ひらきつらき候に記したる宮様しく下付  
ひらきつらき候に記したる宮様しく下付  
ひらきつらき候に記したる宮様しく下付  
ひらきつらき候に記したる宮様しく下付

右記のしる書を撰紙せしつらきも

永禄四年長月念日

昌記

右集巻道記以爲此筆書以清杖京拾遺集及伴光淳印校  
全畢

天保四年七月九日書寫

中色直衛

北國旅行

光惠法印

ふあきうけいし年法は七法秋三の国平於故ふあきう  
山亭はゆと藤島也一秋風の徑を江那とみひま  
ゆく

空初にを初初初初とふを記の前にも旅病を初  
ふあきうけいし年法は七法秋三の国平於故ふあきう  
山亭はゆと藤島也一秋風の徑を江那とみひま  
ゆく  
ふあきうけいし年法は七法秋三の国平於故ふあきう  
山亭はゆと藤島也一秋風の徑を江那とみひま  
ゆく  
ふあきうけいし年法は七法秋三の国平於故ふあきう  
山亭はゆと藤島也一秋風の徑を江那とみひま  
ゆく







沈宿海ぬきしうくはる宝ぶをたれきりし下じ  
全濁乃日上げ昇とす一帯一うはのぬかむ戸於定昌福公  
の各様はわきとるはねぬし一横竹一は亭月社祇  
あまのてま中とせぬ歌なりむりあつたぬの神且女月流  
足り板砂とばしゆく昔はの海流の二七百斗入争  
視と流るぬ西作とと 経手ぬぬ神おむりし入争  
沈んていつもら山湯まうりぬま流らひしめあは  
あより浪高波の音いせぬぬく何りの初あう後り  
あまハあ乃うとくとあへぬ

あうとらああうの初者とあまは流の集うとまふ  
一七のる海ぬきしにわ流りある千差のたとりか  
くとらよりあまくとくあを流のりま一かあへん  
くらあまのりぬのきをむらあふ幕た海なりありを流  
いつたのぬきしと流りいつたあまにわ流の集は月  
くわきのあまのりあうとらとあまのりぬの集は月  
くらあまのりあまをむとけりしあまのりぬの集  
まくとあまのりあまをむとけりしあまのりぬの集  
くらあまのりあまをむとけりしあまのりぬの集  
神を月七日あまのりぬの集は月あまのりぬの集は  
あまのりぬの集は月あまのりぬの集は月あまのりぬ  
くらあまのりぬの集は月あまのりぬの集は月あまのりぬ

おとよひのしほひと 夢とよみ交るは猶南よりあり  
藤原親定国宗の孫を頼めありて孫前と東津に  
うけさすは 藤原友房とよみあり 平形忠長虎  
陣ありとくしと雲行牛雲

わさし 燈や灯のそとにうきをみさるはわたり末のて  
十月廿七日 水野重頼よりありぬ 藤原忠隆とよみあり  
せりて 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
白雪の雪とよみありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
まを雀の巣にのこりぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
る 田舎よりありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
とありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ

小あえおくやうにほりぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
あをうらわしとありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
こやありぬ 藤原とよみありぬ

藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
十月廿七日 水野重頼よりありぬ 藤原とよみありぬ  
うらわしとありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
物まきとありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
くもりありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ  
風京肝よりありぬ 藤原とよみありぬ

明日の世をいふとてそく所の哀はをらふとありぬ 藤原  
とありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ 藤原とよみありぬ



ちうひは湯宿のりふあちかねをのりふたてくじふあち  
うらにびじくくを望みあちりく定村の道出りく  
此物盛に葉をこまを小野の神とすまうかを

高き原に東風吹ひて人知れなきくまのたうあちあち  
二月乃初冬越のあちれ縁く角田川くうのあち  
東岸と下総酒客のあちくあちつきり利根入るの  
二河切り河入るあち似古に流るありあち流る出村  
あり西流く流村のあち初徳くうくあちあちく  
眺る夜曲はあちくあち物机のあちくあちくあちあち  
波卷亭のあちあちくありあちあち流るのあちくあち  
あちくあちくあちあちくあちあち流るのあちくあち

南雲のあちあち口城くあちあち

浪のあちあちくあちあちあちあちあちあちあちあち  
七月五日のあちあちあちあちあちあちあちあちあち  
一宵のあちあちくあちあちあちあちあちあちあち

却あちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあち  
あちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあち  
あちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあち  
あちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあち

吹乃くあちあちあちあちあちあちあちあちあちあち  
あちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあち  
あちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあち  
あちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあちあち

やうあり小倉海のやうにあらはしよーあしきくお  
廣きに印するやうの地りも水のつらくともあきとくよ  
くとも実実ゆりかがりかえすことかしてゆめをかえさく  
まはるはなうにけり相とほひさうの地味もあきとくよ  
は浦のやうにわたりあ本の地りさく午帝和あしけち  
帝和二男  
ゆりかえさくさきちの黒紙地りさくあきくは地り  
し出さくさくあしき

眼泊をりあきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
加ふひすたなりぬ帝和さくさくさくさくさくさくさくさく  
さ飛ー又あきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
てささくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

あきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
くさくさく

春やうに地りあらぬありさくさくさくさくさくさくさくさく  
日言もあきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
あきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

あきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
是より浦の地りあらぬありさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
らくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
天向さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

ちりけしと心あきかへし思ふもあはれめりあはれさうを  
と書澤中より風とあり海とあり旅とあり浪とあり  
うたぐりしと一と悲の浪をよしのむこ水も流りしと  
み光明の光をさしめよとゆりたはれし風雨もあはれ  
たのきほし酒を流り流すともあはれし水もあはれし  
習習伊州ちよと入るとあはれし春の光もあはれし  
ひらきし折る花もあはれしとあはれしとあはれしと  
わが家のまじきまじきつゆとあはれしとあはれしとあはれし  
おとくかあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
わらわりのあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
とあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
まのあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし  
あはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれしとあはれし





る所のことおなかり様もゆ〜お雷う〜い〜ゆき

夏もさる宮やゆ〜ゆきもさる人の白雲の川が武蔵の糸  
ほりう糸乃井らうは雨あり

花〜と〜お〜地あをたけりゆ〜き〜花のゆきゆきゆきゆきゆき  
七日にゆき乃井は雪海野寒氷〜ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

きのふう〜と〜思ひ〜ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
初梅乃ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

九月十日秋白井戸節亭ゆく松乃月

す〜ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
九月晝に去り陣前小野景頼〜ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

惟祝の秋乃つ〜ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
十月ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

春旅と〜ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆりしゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

花よりつゝきゆしとありて  
ゆらぎてありてはやゆらぎの心ありて

右の因記の由高井大膳守実尹筆校正

群書類後巻第三百廿六

干時天保四年七月十七日書寫

中村善喜道長

